学校及び教員の運動促進の取組が児童・生徒の運動嗜好・運動態度に及ぼす影響の比較

○高橋好波、中野貴博、水野太智、稲田　鎮（中京大学）

【教育】

〔背景・目的〕現代の子どもの運動嫌いは、年齢が上がるにつれて増加し、中学生になると明確に好きと回答する割合は半数程度に減少する。教育現場でも様々な取組が行われているため、学校の運動促進計画や教員の取組が子どもの運動嗜好や運動態度を改善できているかを検証し、取組を充実させることが求められる。筆者は、学校・教員の運動促進への取組状況が児童の運動嗜好と運動態度に及ぼす影響を既に報告した。そこで、本研究では、学校・教員の運動促進への取組状況が生徒の運動嗜好と運動態度に及ぼす影響を明らかにし、発達段階の異なる児童と生徒で影響の違いを比較検討することを目的とした。

〔方法〕A 県内の 256 小中学校の体育主任教員及び同小学 5 年生 13,321 名、中学 2 年生 10,428 名を対象とした。教員調査は「学校の取組」3 項目、「教員の意欲」4 項目を分析項目とした。児童生徒に関しては、スポーツ庁の全国体力・運動能力、運動習慣等調査の A 県データを二次利用し、運動嗜好、運動態度に関する 7 項目を分析対象とした。最初に教員及び児童生徒の対象項目に対し、因子分析を適用した。学校の取組⇒教員の意欲⇒児童の運動思考及び運動態度の仮説モデルを構築し、共分散構造分析により児童と生徒の構造の違いを比較検討した。

〔結果・考察〕小中学校共に、教員調査では学校の取組と教員の意欲、児童生徒の調査では運動嗜好と運動態度と解釈される 2 因子が確認された。仮説モデルの適合度指標は、小学校ではいずれも良好であった。「学校の取り組み」から「教員の意欲」へのパス係数は 0.62 で、有意であった。一方「教員の意欲」から「児童の運動嗜好」及び「児童の運動態度」へのパス係数は、0.28 と 0.14 で、運動嗜好へのパス係数のみが有意であった。一方、中学校の仮説構造モデルの適合度指標は、児童のモデルほど良好にならず、影響の構造が異なることが示唆された。また、「学校の取り組み」から「教員の意欲」へのパス係数は 0.21、「教員の意欲」から「生徒の運動嗜好」及び「生徒の運動態度」へのパス係数は、－0.03 と 0.08 で、いずれも有意ではなかった。この結果から、小学校は学校が運動促進に取り組むことで教員の意欲は高まり、児童の運動態度の改善は見られるが、中学校は学校や教員の取組が生徒の運動嗜好・運動態度に及ぼす影響が小さく、取組方法の根本的な改善の必要性が示唆された。